

<b>Title</b>	日本基督教団東北教区被災者支援センターエマオの歩み (第二回東日本大震災国際神学シンポジウム：分科会報告 K)
<b>Author(s)</b>	野田， 沢
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, No.56, 2013.10：191-192
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=4935">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=4935</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

## 日本基督教団東北教区被災者支援センター エマオの歩み

野 田 沢

三・一一の震災後、「日本基督教団東北教区被災者支援センター エマオ」は、三月一五日に発足する。その後現在まで、この出来事に仕えるスタッフの多くが、青年である。また、今でこそ壮年の方々が多くなってきたが、当初一年間ほどはボランティア・ワーカーもほとんどが青年であった。

一面瓦礫の被災地に立ち、あの想像力を超えた痛みの出来事を前になにか希望を見出すことができるとすれば、それは「教育」であろうと感じた。それはなにも青年に対してだけではなく、またキリスト者・非キリスト者も越えて、すべての人間（被造物）に対しての「教育（精神の揺さぶりと目覚め）」であろうと。そしてそれを成すのは「この震災という出来事そのもの」と、それに向き合う「自分自身」。そして、キリスト者であるならば、そこに神の存在を見出す努力や導きの中に、なにかしらの信仰と精神の研磨・向上を願った。

震災後の三月より被災地で、「失ったものは戻らないのだから、新しいものを生み出したい、新しい希望に生かされたい」と、「教育」を旗頭に地域との協力関係を築き、今も活動を続けることが許されている。震災直後のまさに「命からがら」の状況で、「教育」などというもので被災者・被災地と協力できたことは、真に奇跡的な出来事であろうと

感じている。その理解の中で、震災当初も現在もいわゆる「支援」ではなく、成果主義や効率主義を廃し、ゆつくりとこの震災の出来事やそこでの出会いに向き合い歩んでいる。また「支援」だけではなく、むしろ「受ける」ことも大切にし、かつて共に泥をかき瓦礫を取り除いた耕作地をお借りし、農業や花の栽培を「元被災者」の方々から教わっている。

当初より、多くの教派・教会、キリスト教主義学校とのリンクにより支えられており、それらの「連帯」の必要性と課題も感じている。また、多くの牧師・信徒・神学生もこの出来事に触れる機会となっていることは、教会の未来にも影響があるだろう。

日本基督教団という一つの「教会の群れ・キリスト者の群れ」が、日常的に被災者支援を成してゆくには、それなりの苦難があった。祈り支えられ主に導かれつつ歩んできた。なによりも「教会の群れ」としての豊かさを大切に、人道支援の中にあってもヒューマニズムに流されることなく立つことを第一としてきた。